

新沖縄学』アプローチ、体系化試論

皆さんからの御意見を求めるためー

'03.725

吉川 博也

0 . 沖縄学について

(この分野は、小生の専門でないので、いろいろ異論があると思われます。)

沖縄大学にも新人(かくいう私も新人に属しますが)の方が増えましたので、「新沖縄学」について提案する予備知識として、沖縄学について簡単にまとめました。

沖縄学 - 伊波普猷 - とは

伊波普猷の提案、主張した沖縄学は「オモロ」研究を中心にし、歴史・民俗学・言語・文学という個別専門(人文科学)分野を動員(総合化ではないような気がする)して、日本の辺境に位置し、言葉も風習も独自の発展を遂げた沖縄という地域社会のアイデンティティーを明らかにしようとした。すなわち、個別(科学)専門分野の学問的方法、知識を体系化して、沖縄(文化)を総合的に研究し、地域的特性を明らかにしようとしたのが、伊波の「沖縄学」である。

沖縄学のスタンス

当時(日本、大和に編入されて間近な)沖縄の人々の最大の関心事の一つであった日本人としてのアイデンティティーの学問的根拠を求めよう、明らかにしようとした。日琉同祖という仮説(いや主張したために)の下に、柳田、折口、等の主張も踏まえて日本文化の南漸説という結果を導き出した。

沖縄学の今後

個別専門分野は、必ずしも総合性指向、方法論を持つものではない。そこで沖縄という地域レベルでの土着的な場から思考するという方法によって意図的に、総合性を吹き込むということが沖縄学には必要ではないか。

そして沖縄を研究していく過程で、「沖縄的特殊」と思われていたものが、日本さらには世界の普遍の問題・課題といかに共有・共通するかを明らかにしていくことが必要である。

このことは日本的普遍であるものが、沖縄的特殊という形で目に見えやすい型で具現化(環境問題、基地問題など)していく歴史的、政治的過程を、普遍と特殊との関係で明らかにするという課題もある。

《 新沖縄学提案の目的 》

新沖縄学の問題意識、スタンス、目的

よく「沖縄から日本が見える」といわれるが、日本の縮図、例えば環境問題、公共事業問題、廃棄(車)物問題、等々。フィジカルにも、空間的に小さい沖縄は、キャリング・キャパシティーが小さく問題が顕在化しやすい。

このことはある意味で分析(研究)しやすく、またアラーム・システム(カナリヤ)の役割を担わされている。また沖縄は日本、いや世界の問題の研究しやすい「場」を提供するだけでなく、逆に言えばそれらの問題、課題解決の「場」も提供しているはずである。

このことは沖縄は日本を世界を変えていく可能を秘めている研究、社会実験(変革)の絶好の「場」を提供しているといえる。

ここで「新」の意味は、第1に問題を分析、理解するに留まらず解決しようという指向、アプローチ（ある意味で工学的）である。

また沖縄学はアイデンティティーが課題であったので人文科学でカバーできた。しかし現在、沖縄で起きている問題を理解するには自然科学、社会科学、人文科学、理学、工学が必要であり、これが「新」の第2の意味である。

このような問題意識、スタンスには共感していただける点も多いかと思われるが、学問としてどのように体系化、アプローチするかを大学院カリキュラムのコア（哲学、思想）として示す必要がある。

後述する小生の専門の3．問題解決学（システム工学）で説明すると、沖縄問題を理解するための「基礎理論」があり、それを「分析する理論」があり、そしてこれらを踏まえた計画、設計する「総合化理論」という具合である。

学問体系と沖縄大学（研究体）大学院カリキュラム

取りあえず以下、「新沖縄学」について幾つかのアプローチ、体系化の提案を述べますが、必ずしも沖縄大学の大学院の研究・教育体制とはパラレルではありません。

それは沖縄大学大学院をめぐる需要（マーケット）と供給の面（社会的ニーズと大学側の人材資源）があるからです。ここに提案する「新沖縄学」に対する社会的ニーズ（一つの結果としては応募者数）と大学側の有する限りある人材の中で考えなければなりません。これについては別途議論する必要があります。

その場合もそれぞれの先生が例えばここに示すスタンスでそれぞれの科目を論ずるか、またカリキュラムの編成にこの例を反映し全体として明示的にするかの2つがあります。

しかし、この議論から入る前に先ず、少くとも論を整理、情報提供しておく必要があります。

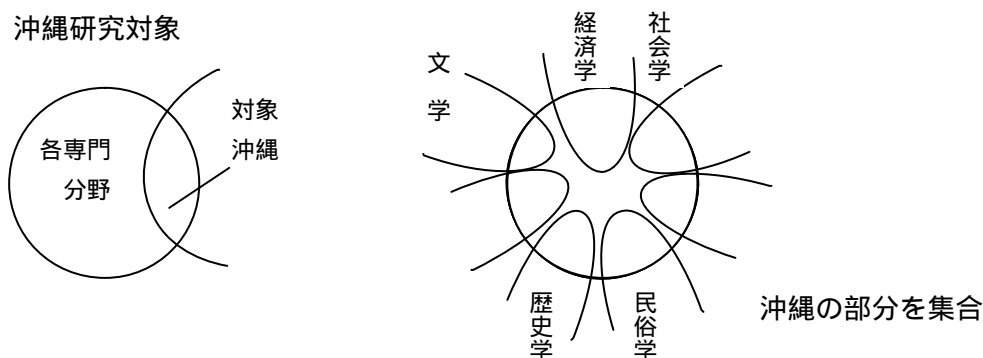
1．沖縄の属性（亜熱帯、島嶼・・・等）による区別でのアプローチ

それぞれの専門分野は、（特に応用分野）それぞれの国のメインランド（主要部分）を主として対象にする事が多い。そうすると辺境で、人口も日本の100分の1である沖縄は、その分野で閉塞視されたり、言ってみれば軽く扱われることが多い。

そうでなくても、ある分野での沖縄特殊論ということになるが、われわれにとっては沖縄普遍論という位置付け、スタンスが望ましい。例えば、日本地理学会があり沖縄地理学会、日本経済学会（？）があり沖縄経済学会があるのはこの例である。

そこで、それぞれの分野の中で、沖縄という対象を研究分野を集めたものを、沖縄学と定義するという考え方があり、これが1．である。図-1のように示すことができる。

図 - 1



このアプローチは、沖縄という具体的な「場」を対象とするので、この「場」の特性、意味が重

要である。沖縄という地域(「場」)は、島嶼という特性があり、それゆえ沖縄の空間は狭く、経済・社会・文化の諸活動が相互に影響を及ぼさざるを得ない。

この典型が環境と開発の関係にみられる。また本土から沖縄に来た自然地理の専門の研究者が2～3年すると人文地理も専門としている(せざるを得ない)。またその逆も多い。

このように沖縄の研究は優れて総合的、システムの視点が、理論的にも現実の問題解決のためにも欠かせない。

<本アプローチのポイント、論点>

- 1) 前述したようにそれぞれの専門分野の沖縄部分の相互影響などへの理論的、現実の問題解決のための総合的、システムのアプローチの方法をどうするかである。これについては3.で述べる。
- 2) 図-1(大変、抽象的で申し訳ないが)にも示されているように中心部が空洞になっている。これは個別専門分野では捉えられない、取り残された課題、問題(例えばアイデンティティ、基地問題など)を明らかにすることである。そして勿論この1) 2)は関連する。

2.関係性(取りあえず、分かりやすく「民際学」的)としてのアプローチ

民際学 - 私の解釈 -

中村尚司(龍谷大学)によって提唱されている。人間は部分として生きているのではなく、全体として生きているから「私とあなたの相互関係」の中でできていく。そして事実や現象を、このヒトとヒト、ヒトとモノとの関係を基本に理解し、市『民』同士が交『際』の仕方を創造していくことによって問題を解決しようという『学』である。中村氏の場合、この関係を特に国際間、先進・途上国にスポットを当てている。

ある物事、現象を捉えるとき「人と人、人と物の関係(ある意味で客観的ではなく主観的な捉え方)を基本として位置付け、構造付けたアプローチをする。

沖縄は歴史的にも政治的にも日本本土との関係では常にマイノリティーとして位置付けられてきた。このような関係性を踏まえて分析することによって、今の沖縄の諸現象、問題が統一的に理解できる。

ここでは自分の専門の経済、開発学を例にして関係性アプローチを説明してみたい。

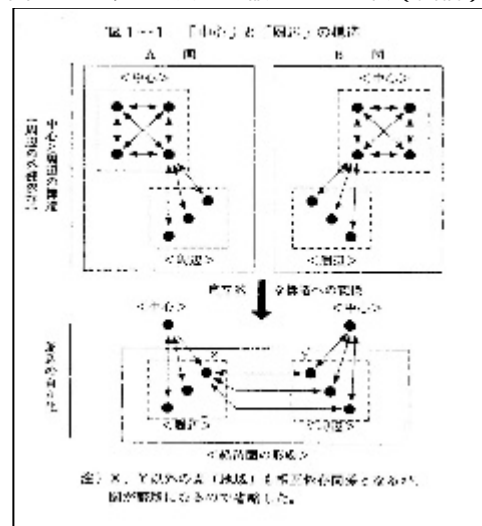
この方法論の真骨頂は新たな関係性を創造する事によって学問を実学(問題解決科学)にすることである。

<関係性(民際学的)アプローチによる問題解決提案>

アミンの「中心・周辺」論によれば低開発地域は、はじめから低開発地域であったのではなく、構造的に低開発地域に位置付けられ、貶められているのである。(すなわち発展している経済地域は自己中心的、低開発経済地域は外部依存的な特性になると、アミンは表現している)。

そこで図-2のように従来の「中心・周辺」論からの発想の転換で、各国・各地域で周辺、僻地と考えられていた地域が Key Place とし、それ実体の役割を担いながら相互に有機的に結びつき、それぞれが核と

図-2 「中心・周辺」論とその逆転(拙稿)



なって異質的・重層的に全体を保つことが可能である。すなわちそれぞれの「周辺」が相互と結びつけば、外部依存ではなく自立的、中心的構造となる。イメージとしてはマスクメロンの網のようにどこでも同じ中心となれるような構造である。>

そしてこのようなアプローチは世界の、そしていろいろな分野のいわゆるマイノリティーへのアプローチ、運動として極めて有効である。

小生がこの社会（実験）運動で実践したのは「与那国開港 - 辺境の逆転 - 」です。小生のホーム・ページ等をご覧ください。

『私の主張』 2 . まず航路ありき 「辺境の逆転 - 日本最西南端与那国開港」(PDF ファイル)をぜひ開いてみてください。与那国の写真もきれいですし、エッセイ風に書いています。

3 .(沖縄)問題・課題解決学としてのアプローチ

このアプローチについては先週の土曜講座で桜井先生の「それは持ちますか」という話を聞き、大変、刺激されました。小生が大分昔（1975年）に『環境工学の体系化』（理工新社）という本を書いたことがあり、これを使って提案してみます。

このアプローチはシステム工学的なもので、それぞれの工学分野（例えば機械工学、土木工学、等）を分野別ではなく機能的（制御論、測定論、等）に体系化したこの「基礎工学」に「計画論」を加えたものです。その時、計画値を（目的関数）最大化、とするのではなく環境容量の下での最大値、等を求めるようになっている。

そろそろ時間切れになってきましたが、このシステム工学的アプローチは他書もありますし、また近日中に試論（ ）で述べます。ここでは環境工学（体系図） 問題・課題解決学の対応表のみ示してみました。